

【新しい技術を導入する前にやるべきこと】

本連載でも栽培技術には何度も触れてきたが、最近、危惧しているのは新しい技術の情報収集や導入ばかりに熱心なことである。もう少し、基本的な部分を見直せば、上手く栽培できるということについて書いてみたい。

栽

**培技術は基本に立ち返る
以外に向上の余地なし**

植物は基本的に何もしなくても育つ。むしろ、何も手を加えないほうがよく育つこともあるくらいだ。特に露地栽培では、人間は作物の成長を手助けしているだけに過ぎない。それなのに、まるで自らが作物を育てているかのような勘違いが多いように思う。

播種してしまえば、ほとんど何もできないということに気づいている人は、露地栽培の農家でも意外と少ないのである。栽培期間中にいろいろな管理作業があるので、自らが育てているように感じるかもしれないが、残念ながらそうでもない。

プラスの影響を与えているのは施肥くらいだろうか。それも作物が必要としているタイミングで与えられた追肥に限定される。植物の生育ステージ、あるいは天候条件によって与えるべきではない場合も、あまり考慮しないで追肥をしてしまう

と、その施肥はマイナスに影響してしまう。

たとえば、生殖生長期（実を肥大する時期）に過度の窒素肥料を与えることで、倒伏や病害虫を招く要因を自ら作っていたりする。これは植物の生理を理解できていないことによる弊害だと思う。追肥の失敗は非常にわかりやすく、水稲の収穫時期を迎えた時期に、圃場全面で稲が倒伏している圃場もあれば、見事に黄金色の穂が実っている圃場まであることからわかるだろう。

もちろん、多くの方は登熟の時期に窒素が効き過ぎると良くないことは知っている。でも、施肥をしないと減収するのではないかとという恐怖から、どのような条件でも窒素肥料の追肥をしてしまうというわけだ。今年のように夏の登熟期が涼しく、天候不順な場合、窒素の追肥は特に注意が必要だ。天候や稲の条件が違うときにどうすればよいのかを理解していないために従来どおりの施肥を行なってしまうのである。

その他の除草や防除作業は、雑草によって成長を阻害されたり、病害虫の被害にあつたりといったマイナスの影響を防ぐことがその目的である。あくまでも圃場に植えるまでの準備が大事で、その時点で栽培の良さ悪しはほとんどが決まってしまう

岡本 信一 Shinichi Okamoto

1961年生まれ。日本大学文理学部心理学科卒業後、埼玉県、北海道の農家にて農業研修。派米農業研修生として2年間アメリカにて農業研修。種苗メーカー勤務後、1995年 農業コンサルタントとして独立。1998年(有)アグセス設立代表取締役。農業法人、農業関連メーカー、農産物流通企業、商社などの農業生産のコンサルタントを国内外で行っている。講習会、研究会、現地生産指導などは多数。無駄を省いたコスト削減を行ないつつ、効率の良い農業生産を目指している。

Blog : 「あなたも農業コンサルタントになれる」

<http://ameblo.jp/nougyoukonnsaru/>

PROFILE

ため、その後の管理作業はマイナスに影響する要素をいかに減らすかという勝負をしているだけなのだ。

栽培技術を創意工夫、新しい技術で向上できると思っているのであれば大間違いである。栽培技術というのは基本的な部分を押さえて作業をした上で、進歩することができる。天候によって、追肥の内容を変えることすらできない場合、作物からしてみれば窒素が要らない状態なのに、窒素を追肥しているような場合には、そもそも植物の生理に逆らっているのだから栽培は上手くいかない。何か小手先の技術を導入して無

駄になるだけである。これは断言してもよいと思う。

栽 培が上手いかわからない要因と見直すポイント

栽培が上手いかわからない人と栽培が上手いと言われる人は、多くの場合、似たようなことをしている。それなのに、どうして上手いかわからないのかというと、明らかに違いがある。それは、植物の成長を邪魔しているか、していないかに注目してほしい。栽培技術は作業工程を真似ることでは、同じようにはできない。上手い人は、作物や天候を観察して、理にかなったやり方をしているのだから。

ここで、露地栽培の場合の代表的な作物の生長を阻害している要因を挙げてみよう。多くはこれまでの連載の中で触れてきた内容である。繰り返しになるがマイナスになる要因を列記してみる。

●排水が悪い

典型的な要因だが、畑に水が貯まってしまうのは仕方がないと諦めている人が多い。さらに、出来の悪い理由をそこに求めているのである。絶対に排水条件を改善できない場合もあるが、耕し方を工夫するだけでも水たまりの発生を防ぐことは可能で、水たまりができることを当たり

前と思わないことが大切である。

●圃場内の揃いが悪い

圃場内の揃いが良いか悪いかで、いわゆる歩留まりが決まっていると言ってもいい。揃いの良いきれいな圃場は儲かる圃場なのだ。原因はいくつもあり、株間の揃いが悪い場合や発芽不良であることも多い。圃場内の揃いが悪いのは、栽培にとって大きなマイナスであると考え、揃いが良くなるように改善を図る必要がある。

●播種床づくりに失敗している

最近、多いのはこれだ。栽培面積が拡大するにつれて、無理をして耕起作業などを行なうケースが増えている。ある意味仕方がないといえるのだが、栽培面積の見直しも含めて考える必要がある。クローラタイプのトラクターは土壌の条件が悪くても圃場で作業ができることで悪影響を及ぼしているケースもあり、全天候型という理解は間違っている。

●基肥が過度に多い

最近土づくりの名の下に有機質を含んだ肥料が多く投入される傾向にある。有機質のものは即効性がなると判断され、特に畜産の糞尿由来の堆肥は、施肥効果を考えずに大量

投入されることがある。有機質であっても投入に際しては肥料成分の計算をきっちり行ない、過度な投入を防ぐ必要がある。

●追肥の時期、量がミスマッチ

追肥は、栽培暦などを参考にして施されるケースが多い。本質的には栽培状態に応じて変更するべきものである。しかし、肥料を削減したり、調整したりすることを嫌う人が多いため。追肥のミスマッチが減収要因につながるのと知りつつ、減らすことができないことが問題なのである。

以上、具体例を挙げてみたが、思い当たることはないだろうか。これらは実際に減収につながる要因でありながら、案外見過ごされていることが多い。何より、注意して作業を行なうことで防ぐことができ、費用をかけずに取り組めるものである。栽培技術を向上するというと、新しいことを取り入れることだと思いがちだが、問題の解決は基本的なことをきちんと忠実に実行することで改善できることも多いのである。

不思議なことに、これらは指摘されて初めて認知される。それまで気づかない理由は、通常行なっている作業がルーチンワークとなっ

て、なぜその作業を行なっているのかということ忘れてしまっているからではないだろうか。基本的なことできていないまま、高価な資材や新しい機材を使ってもあまり大きな改善にはつながらない。まず改善すべきは前述の要因を一つずつ減らすことであり、新しい技術を導入することではない。

もう一点、気づかない理由がある。多くの場合、圃場の状態は徐々に悪化しているためである。誰かが気づいていたとしても、面と向かって指摘する人は少ない。その結果、普通に考えればおかしい状態が続いてしまっている。そのおかしな状態を指摘することも私の仕事の一部なのだが、どうも栽培指導をしている人でもこれらを指摘することが少ない点は問題だと思ふ。

圃場内の農産物を100%出荷できるようなるだけで、経営は大幅に改善すると知りながら、一部は出荷できない状態になっていないだろうか。基本的に全量を出荷できるのが当たり前であるということを出し、新しい資材を投入して改善を図る前に、ここであげた具体的な例をも含め自らの栽培を見直すことを薦める。見直しを図る点が見つれば見つかるほど、これから大幅な収益改善を見込めるのだ。